

水溶液の色相が心理効果に及ぼす影響に関する研究 —入浴剤における—

The Study of Mental Effect by the Color Solution —In the Case of a Bath Salts—

高松 衛
中嶋 芳雄
藤井 侃
佐伯 行紀
荒井 哲也
田内 博幸
三上 寿枝

Mamoru Takamatsu
Yoshio Nakashima
Sunao Fujii
Yukinori Saeki
Tetsuya Arai
Hiroyuki Tauchi
Toshie Mikami

富山大学工学部
富山大学工学部
五洲薬品株式会社
五洲薬品株式会社
五洲薬品株式会社
五洲薬品株式会社
五洲薬品株式会社

Faculty of Engineering, Toyama University
Faculty of Engineering, Toyama University
GOSHU YAKUHI Co. Ltd.
GOSHU YAKUHI Co. Ltd.
GOSHU YAKUHI Co. Ltd.
GOSHU YAKUHI Co. Ltd.
GOSHU YAKUHI Co. Ltd.

キーワード: 水溶液, 心理効果, SD 法, 色相, マンセル
表色系

Keywords: Solution, Mental effect, SD technique,
Hue, Munsell color system

1. はじめに

ストレス社会とも言われる現代においては、色による心理的作用をもとにリラックス効果を及ぼす製品が数多く開発され、注目を集めている。その代表的な一例として『入浴剤』を挙げることができる。近年では多くの種類の入浴剤が開発され、美しい色彩と香りを自ら選び楽しむスタイルの入浴が定着しつつある。

ところで、私たちは色にある種の印象を持つが、その印象は色毎に異なっている^{[1],[2]}。また、色が同じでも、その明るさや彩やかさの違いによっても人間の感情は大きく左右される。例えば、安らぎを感じさせる色、覚醒を促す色などその効果は様々である。従って、目的に応じて色や香りを意識的に選択することにより高い入浴効果を得ることが可能になると考えられる。

そこで本研究では、水溶液の色相によって及ぼされる心理効果について、心理物理学的手法により測定を試みた。またさらには、入浴剤のもう 1 つの大きな特徴である白濁についても、その度合いによって心理効果にどのような影響を及ぼすのか、検討・考察を試みた。

2. 実験方法

実験方法を以下に示す。まず、マンセル表色系の等明度面での色配列をもとに、基本色相である 5R, 5Y, 5G, 5B, 5P 及びそれぞれの中間色の計 10 色相の水溶液サンプルを作成した。さらに、各色相について白濁の度合いを 4 段階に変化させた水溶液も作成し、合計 50 種類の水溶液サンプルを

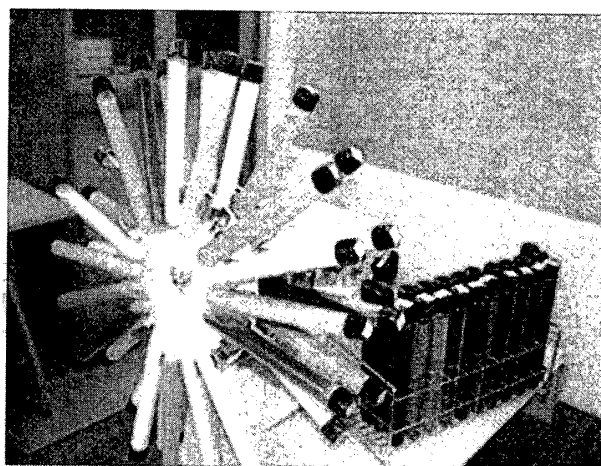


図1 水溶液サンプル

用いて実験を行った(図1)。被験者は、それぞれの色の水溶液を蛍光灯の照明条件下にて観測し、感じた印象を7段階の評価尺度をとるSD法^{[3],[4]}により評価する(図2)。

なお、被験者は男性 14 名、女性 5 名の計 19 名である。

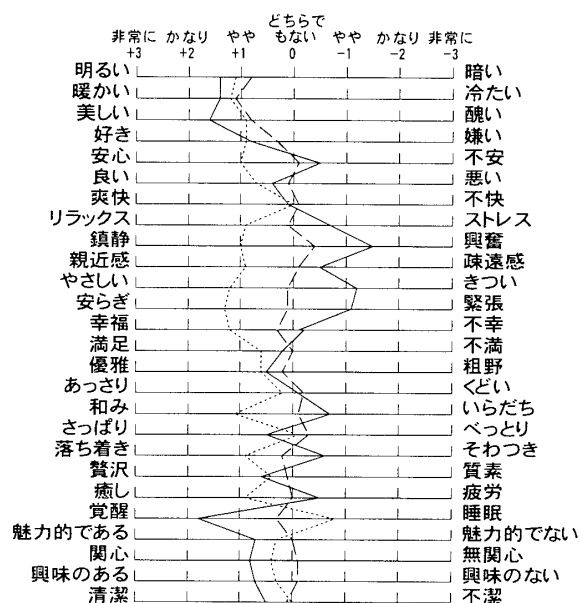


図2 データシート

3. 実験結果

結果の一例を図3に示す。最も評価値の高かった5YRと5GY色相、及び、最も評価値の低かった5BGと5P色相における全被験者平均を、極座標にプロットしたものである。円周方向には形容詞を、但しポジティブ側のみ、半径方向には評価値をとっている。

結果より、水溶液の場合においても、色相の違いにより心理効果に差があることが示された。特に「明るい」、「あっさり」、「爽快」など、一般的に入浴に望まれている効果に関連する形容詞においても、評価値の高いものと低いものとの差が顕著に現れた。

色相毎に見た場合では、5YR、5GY、5G、5Yの順序で黄色から緑にかけての色相において評価値が高くなる傾向を示した。一方で、5BG、5P、5PB、5Gの青から紫にかけての色相で、全体的に評価値が低くなる傾向を示した。特に5Gから5BGにかけて評価値が急激に低下しており、5G色相近辺の色を使用する場合は、極力青側にならないように注意する必要があると言える。

一方、図4に各色相及び白濁度レベル毎に、全被験者平均で最もスコアの高かった形容詞を抜き出し、マッピングしたものを示す。

青系統の色相の水溶液においては、『鎮静』、『癒し』の効果が高い傾向が示された。反対に赤系統の色相の水溶液については、『覚醒』、『暖かさ』、『明るさ』といった形容詞のスコアが高く、前述の青系統の結果とは極めて対角的であった。

4. まとめ

本研究では、水溶液の色相が及ぼす心理効果について定量的測定を試みた。その結果、以下の点が明らかとなった。

- (1) 最も評価値の高かった色相は5YR、5GYであった。また、これらの色相と同系統の色相も全体的に評価値が高い傾向を示した。
- (2) 5GBから青方向の領域の色相で評価値は低くなる傾向を示した。従って緑系統の色相を使用する場合、極力青よりにならないことが望ましいと考えられる。
- (3) 青系統の色相は『沈静』、『癒し』などの心理効果を及ぼし、一方赤系統の色相では、『暖かい』、

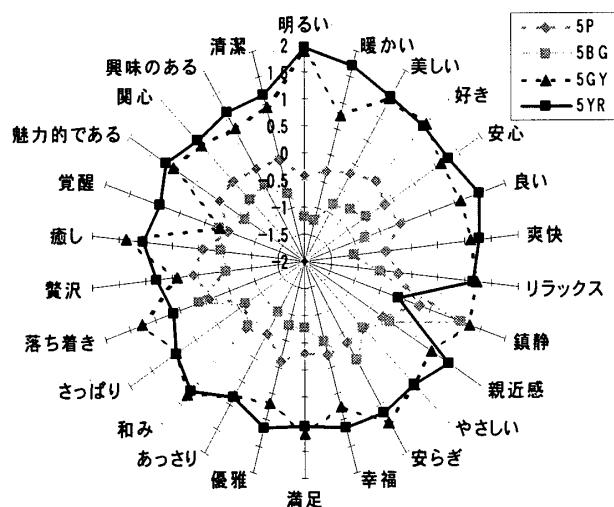


図3 極座標表示による心理効果

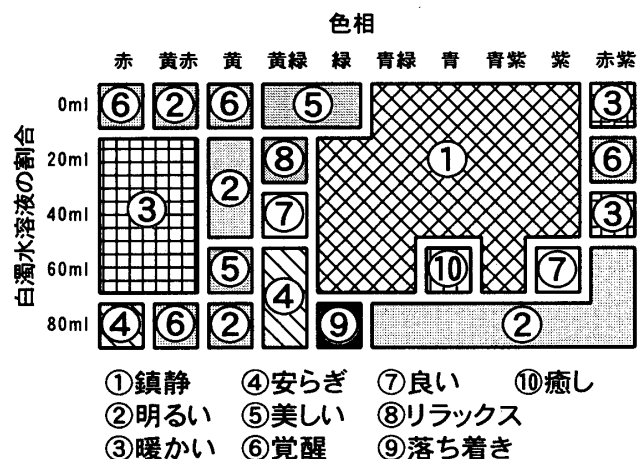


図4 色相及び白濁レベル毎における心理効果

『明るい』などの心理効果が顕著であった。

参考文献

- [1] Birren, F.: Color Psychology and Color Therapy, McGraw-Hill Book Co., (1950).
- [2] 大山正, 田中靖政, 芳賀純: 日米学生における色彩感情, 心研, 34, pp.109-121 (1963).
- [3] Osgood, C. E.: Semantic Differential Technique in the Comparative Study of Cultures, Amer. Anthropologist, 66, pp.171-200 (1964).
- [4] Osgood, C. E.: Studies on the Generality of Affective Meaning Systems, Amer. Psychol., 17, pp.10-28 (1964).